

# お薬のしおり

## 抗インフルエンザ薬と注意事項 No.142 (H25.12)

東京医科大学病院 薬剤部

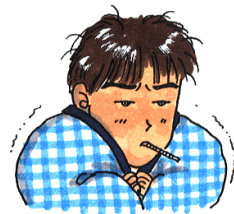
今年も12月を迎えて寒さも厳しくなり、インフルエンザの流行時期が近づいてきていますが、みなさんはインフルエンザの予防はできていますか？今回は、インフルエンザにかかってしまった場合の治療方法とその際の注意事項についてご紹介します。

インフルエンザにかかったら、できるだけ早めに医療機関を受診することが必要です。では、インフルエンザの症状とはどのようなもののでしょうか？インフルエンザウイルスに感染した場合、約1～3日の潜伏期間の後、インフルエンザを発症します。発症後、約1～3日では、突然の38℃以上の高熱や全身の倦怠感、食欲不振などの全身症状が強く現れます。その後少し遅れて、咳やのどの痛み、鼻水などの呼吸器症状が現れ、腰痛や悪心（吐き気）などの消化器症状が出ることもあります。

インフルエンザの治療は、一般療法と薬物療法の2つに分けられます。  
＜一般療法＞安静にして十分な休養と睡眠を良く取る、十分な水分補給を心がける、マスクを着用し、家族などの周りの人に感染させないようにする、などが挙げられます。

＜薬物療法＞現在では、インフルエンザの治療にはインフルエンザウイルスの増殖を抑える抗ウイルス薬が用いられます。インフルエンザウイルスは増殖の速度が速く、症状が出現して48時間以内にウイルスの増殖のピークがきます。このため、48時間に抗ウイルス薬を服用しないと薬の効果が現れにくくなります。抗ウイルス薬を発症後すぐに服用を開始すると、服用していない場合と比べて発熱期間が1～2日短縮され、ウイルスの排泄量も減少し、症状が徐々に改善されていきます。現在、この抗ウイルス薬は、ノイラミニダーゼ阻害薬が主に用いられます。

□ノイラミニダーゼ阻害薬：ノイラミニダーゼは、ウイルスが細胞内に入り込んで増殖した後、その細胞から離れて



別の細胞に移動するときに働くタンパク質です。そのノイラミニダーゼの働きを阻害することで、ウイルスの増殖を防ぎます。A型、B型インフルエンザともに有効で、内服薬、吸入薬、注射薬（点滴）の3剤型、4品目があります。成人の用法・用量は以下の通りです。

**内服薬**：タミフル（カプセル、ドライシロップ）：1日2回、5日間服用

**吸入薬**：リレンザ：1回2吸入で1日2回5日間吸入

イナビル：40mg（20mgを2本）、1回分を吸入

**注射薬**：ラピアクタ：通常1回300mgを15分以上の点滴（その後の回復が遅いときや重症化しやすい患者さんには連日点滴が可能）

**□アマンタジン（シンメトレル）**：A型インフルエンザのみに有効ですが、耐性ウイルスがでやすいため、現在ではあまり使われません。インフルエンザの治療以外にパーキンソン症候群の治療にも用いられます。

**＜注意事項＞**：小児や未成年者において、インフルエンザ発症後にお薬の服用の有無に関わらず、異常行動などの精神・神経症状が発現することが知られています。この異常行動などの精神・神経症状は、インフルエンザによる発熱後数日以内（多くが2日以内）や睡眠中に発現することがあると言われています。このため、異常行動による転落等の事故を防ぐためにも、インフルエンザと診断されてから少なくとも2日間、保護者の方は就寝中を含め、小児や未成年者を1人きりにさせないようにしてください。

**＜治療上の注意＞**抗ウイルス薬を服用し、熱が下がっても、体内のウイルスがすぐにいなくなるわけではありません。症状が改善したからといってお薬の服用を途中でやめることで、体内に残っているウイルスが周りの人に感染する可能性があります。熱が下がったあとも、お薬はきちんと使い切り、最低2日間は自宅で療養しましょう。また、高齢者や小さなお子さん、喘息や心臓病、糖尿病などの慢性の病気がある人や妊娠中の女性がインフルエンザにかかると重症化しやすい傾向があり、肺炎などを合併してしまう危険性があります。自分がインフルエンザにかかった後、周囲の人にうつしてしまうことがないように注意をしましょう。お薬のことでご不安な点やご不明な点がある場合には薬剤師までご相談ください。

